

ナイチンゲールといえば「クリミア戦争」を連想する人は多いでしょう。クリミア戦争は、ヨーロッパと中東地域の様々な政治的、文化的、社会的要因が絡み合った近代戦争の先駆けであり、また、歴史上はじめて「世論」が戦局を左右した戦争と言われている。戦地から離れた本国の人びとが新聞報道を通じて戦況を知り、それに対する意見を新聞の投書欄に投稿する。やがてそれが大きな世論を形成して、ついには内閣を総辞職に追い込むことさえありました。

ナイチンゲールが時代のヒロインとなったのも、この世論が大きく関係しています。彼女は悲惨極まりない状況だった戦地の野戦病院で、典型的な官僚組織である陸軍を相手に、状況改善に邁進しました。それまで見捨てられていた負傷兵にとって、ナイチンゲールが天使に思えたのも不思議ではありません。ただ、それが寓話化されて本国に広がり、「英雄」に祭り上げられたことに、本人は複雑な思いだったようです。なぜなら、多くの兵士を死なせてしまったことに深い自責の念を抱いていたからです。本書では「ナイチンゲールとクリミア戦争」について、当時の政治状況や社会状況をはじめ、様々な側面に焦点を当てて、考察します。

(編集部)

クリミア戦争はどのような戦争だったのか

玉井史絵

「クリミア戦争」といえば、日本ではもっぱらフローレンス・ナイチンゲールが「クリミアの天使」となった戦争として知られている。この戦争は二十世紀に勃発する二つの世界大戦と比して、相対的に小規模な戦争とみなされてきたので、あまり多くの歴史家の注目を集めてこなかった。しかし、クリミア戦争は、ヨーロッパと中東地域の様々な政治的、文化的、社会的要因が絡み合った、二十世紀近代戦争の先駆けとなる戦争であった。ナイチンゲールが時代のヒロインとなった要因も、この戦争の性質そのものと深くかかわっている。本稿では、この戦争を概観することによって、本書の後の項目で詳述されるナイチンゲールの活躍が伝説化されるに至った背景について考察する。^{★1}



★1 クリミア戦争の歴史的事実の記載に関しては、主にオーランド・ファイジズ『クリミア戦争』（上・下）（引用文献▼1）およびPalmer, A. 『The Crimean War』（引用文献▼2）に基づく。

「ランプを持つ貴婦人」の誕生

杉浦裕子

フロレンス・ナイチンゲールといえば「ランプを持つ貴婦人」や「クリミアの天使」としての像が言語、画像の両媒体において定着し、伝説にまでなっている。本稿ではクリミア戦争中の新聞報道を中心に、ナイチンゲールの代名詞ともいえる「ランプを持つ貴婦人（*Lady with a Lamp*）」としての像の創出から伝播について検討し、アイコンとしてどのように活性化され、利用、消費されていったかを論じる。

クリミア戦争と新聞報道

「タイムズ」紙と「国民の戦争」

クリミア戦争はリアルタイムでメディアを騒がした初めての戦争といえる。すでに一八四〇年代後半から、プロの海外特派員が電報を用いて、より正確な情報をより速やかに届けるシステムは始まっていたが、そのメディアの技術進歩がいかに発揮された最初の戦争がクリミア戦争だった。戦況が速やかに伝えられたことで、クリミアからのあらゆるニュースがイギリス国民の愛国心に訴えた。当時の新聞の中でも他紙の追従を許さぬ圧倒的な部数を